青年期の進路選択とその支援に
心理学的研究がどのように貢献できるか

企　　画：　日本発達心理学会国内研究交流委員会
司　　会：　石野陽子　（島根大学　教育学部）
話題提供者：　安達智子　（大阪教育大学　教育学部）
話題提供者：　望月由起♯　（お茶の水女子大学　学生支援センター（キャリア支援センター兼務））
話題提供者：　浦上昌則　（南山大学　人文学部）
指定討論者：　小石寛文　（神戸学院大学　人文学部）

[企画主旨]

青年期における重要な発達課題のひとつとして進路選択があげられる。具体的には進学や就職がこれらの一部分にあたる。この進路選択は本人の青年期のみならず後の生活や人生を大きく左右する要因となることは間違いない。また、本人だけでなく周りの者へも少なからず影響を与えるだろう。ところで、この進路選択をめぐる近年の日本の状況を見ると、例えば大学進学率が 20 余年にわたって増加傾向にあり 2005 年以降は全体の 5 割以上を超えている。しかしながら、大学卒業後も就職先が決まらず、就職したとしても数年以内に退職の道を選ぶ者も多い。先に触れたように、進路選択はその後の人生に大きな影響を与える重要な事柄である。にもかかわらず、時代の潮流に乗り本来行なうべき確かな進路選択を先送りにし、将来を見据えた上での現在の自己を見失ってはいないだろうか。

本来の自分の生きる道を模索し、大学生活を積極的・主体的に充実させるために、実のある将来設計を行なうために、また社会参加を目指すために、若者やそれらを支援する者に対して心理学的研究が有意義な示唆を与えることはできないだろうか。本シンポジウムでは、これらの問題について今後のより良い方向性を探る場としたい。

「若者のキャリア意識―その捉え方と働きかけについて―」

安達智子（大阪教育大学　教育学部）

若者のキャリア選択に対する支援には、2 つの側面がある。ひとつは、就職情報の収集や面接試験の受け方、エントリーシートの書き方などに関するもので、いかに武器を持たせて就職戦線へ送り出すかである。この場合、最新情報をアップデイトできるように、面接では好印象を与えられるように、そして、第一関門を突破できるようなエントリーシートをと、支援の方向性はおおむね一致するところである。では、もうひとつの側面、我々心理学者が関心をもち研究をかさねてきた心理的側面に対する支援はどうだろうか。自己効力、決定、成熟、価値観など、これまで様々な指標をもちいて、キャリア選択に関する若者の心理が測定され支援について研究が行われてきた。そして、その多くでは、こうした指標の点数が高くなることが望ましいとされている。しかし、キャリア選択にまつわる心の捉え方は、果たしてそのように静的で絶対的なものなのか。変化・発達しつづける個人の立場や状況、社会環境から影響を受けて変動する、よりダイナミックなものではないか。

こうした疑問点をもとに、話題提供者は、「適職信仰」、「受身」、「やりたいこと志向」という 3 つの側面から、若者のキャリア意識を調査してきた。“いつかぴったりの何かに巡り合えるはず”という適職信仰、“まだ動かなくても何とかなる”という受身、“好きな事、やりたい事だけをしていたい”というやりたいこと志向、これらは実に“今どきの若者的”であり、支援や働きかけをするときに扱いづらく問題視されてきた傾向であった。しかし、調査結果から、これらは必ずしも不適応的ではないこと、また、そのときの状況によって変化し得ることなどが示された。本発表では、これらのデータを材料にしながら、若者のキャリア選択にまつわる意識と支援について考えてみたい。

「大学入学者のキャリア成熟と親の影響」

望月由起（お茶の水女子大学　学生支援センター（キャリア支援センター兼務））

近年、多くの若者にとって、大学に入学することはゴールではなく、通過点の一つに過ぎないように思う。本報告では、大学に入学することが決定した者（以降、「大学入学者」とする）のキャリア意識について、報告者の大学の入学者及びその保護者に実施している調査をもとに、キャリア教育・支援の実践者としての立場から話題提供を行ってみたい。

若者のキャリア意識は自然に形成されていくものではなく、当人を取り巻く環境の影響も大きいことは言うまでもない。大学生のキャリア教育・支援に直接的に関わっている報告者は、中でも、家庭、親の影響の大きさを痛感している。そこで本報告では、「親が当人の進路選択に対する関与（直接的影響）」「親の学歴（大学に入学し卒業した経験があるか否か）（間接的影響）」に焦点をあて、大学入学者のキャリア意識と親の影響の関連を探ることも試みる。

本報告では、キャリア意識と称される広範な概念の中でも"キャリア成熟"に着目していく。キャリア成熟は、進路選択やその後の適応への個人的レディネスを測定・評価する目的で使用されることが多く、進路指導やキャリア教育がその達成を目指してきた概念である。若者のキャリア成熟に目を向けることは、彼らへの教育・支援のあり方やその効果を捉える上で有益なものと思われる。

就職戦線を勝ち抜くためのノウハウの伝授や良質な就職情報の提供を否定するわけではないが、長期的視点からみての、学生のキャリア意識形成に対する教育・支援機能を大学は忘れてはなるまい。本報告で取り上げる話題を一般化することはできないが、フロアの皆さまとの議論を重ねながら、大学生のキャリア意識への理解が促されるような情報を拡充し、個々の大学でのキャリア教育・支援を改めて検討する契機となることを期待したい。

「「青年の社会認識」という視点」

浦上昌則（南山大学　人文学部）

青年期の進路選択が，個人の生涯発達において大きな問題であることは疑いない。しかしそれは単に個人的な問題，個人内に留まる問題ではない。それは個人と社会の関わりに関する問題，個人がどのように社会に関わろうとするかという問題である。それゆえキャリア支援においては，自己理解や進路先の理解に関する支援が一般的に行われている。ところがこの場合の進路先というのは，職業に関する理解，進学先の理解である場合が多く，社会の理解とは言えない場合も多い。進路選択は，個人と社会の関わり方の選択という認識は一般的ではあるが，実際は社会ではなく，進路先との関わり方というレベルに留まっていると指摘できる。

社会といえば，発達心理学において「社会性」の発達はひとつの大きな研究領域といえよう。これまでにも関連する多くの研究がなされてきた。社会性が進路選択という社会参加において重要な要因であることに異議はないが，それは「社会」自体に対する理解とは一線を画すものであろう。また，「社会概念の発達」「社会観の発達」というような研究はほとんど見かけない。そのため我々は，青年が「社会」をどのように理解しているのか，どのように発達していくのか，それが進路選択にどのように影響しているのかなどについての知識を，それほど持っていないのではないだろうか。

今回は，青年の社会認識が成熟していないことを，現在の問題の一要因と仮定し考察を加えてみたい。具体的には，いくつかのキャリアに関連する研究を紹介し，社会に対する認識と進路選択の関連について検討したい。またその形成に関しては，社会科の理念や具体的な内容，いわゆる「世間論」が提起する我が国の特徴などを取り上げてみたい。これらを切り口に，青年期の進路選択に寄与するための心理学について議論ができればと考えている。